

広田遺跡の「山字貝符」

鹿児島県の種子島といえば、今は、H-II-A 型ロケットが打ち上げられる宇宙センターの所在地として知られ、歴史の教科書では、1543年、鉄砲が伝来した島としておなじみだ。ロケットに鉄砲と、「昔も今も最先端」がキャッチフレーズの種子島には、約35,000年前の火山灰層直下で後期旧石器時代の生活遺構が発見された立切遺跡など、他にも「最先端」の歴史が存在する。有名なのは、南種子町の広田遺跡で発掘された「山字貝符」で、かつては日本最古の文字資料とされていたものだ。

広田遺跡は、太平洋に面した小さな湾の砂丘上にある弥生～古墳時代にかけての埋葬遺跡で、昭和30年(1955年)9月、台風のために砂丘前縁が崩壊し、崖面に人骨や土器、貝製品などが露出した



写真1 広田遺跡から宇宙センターを望む

ことが発見の契機となった。昭和32年(1957年)夏、国分直一氏(当時、下関水産学校教授)、森園尚孝氏(当時、中種子町野間中学校教諭)が行った第1次発掘調査では、1mに及ぶ砂層から、ゴホウラ、イモガイ、ヤコウガイ等の貝殻を加工した多数の貝製装身具が人骨群とともに発見され、特徴的な習俗をもつ人々の集団墓地の遺跡だと判明した。発掘調査は昭和34年(1959年)まで、毎年夏、延べ90日をかけて行われ、昭和33年(1958年)の第2次調査からは、九州大学の人類学研究室の金関丈夫・永井昌文両氏らが加わり、最後の第3次調査には、天理大学に着任したばかりの金関恕先生が参加した。山口県の土井ヶ浜遺跡の調査スタッフが舞台を移して再び集結することになったのだ。

3年にわたる発掘調査で出土した100体以上の人骨からみた広田人の特徴は、面長・高身長^{おびただ}の渡来系の土井ヶ浜人とは異なっており、身長が低く、東日本縄文人に近い立体的な顔貌をもち、独特の抜歯等の習俗を持っていた。また、崖面の下層の人骨は一体ずつ砂層に埋葬された姿勢を保っていたが、上層の人骨は多数の骨が集められて再埋葬されたものだった。「貝符」(ペンダント)、腕輪、ビーズなど、人骨に伴って出土した夥しい数の貝製装身具類は、下層から上層へと文様や形態の変化が見られ、とくに「貝符」は、複雑な文様を彫刻し、紐を通す孔が開いた下層のタイプから、孔を持たず文様も簡略化した上層タイプへの変化が見られ、実用的なアクセサリから葬送用の非実用的なものへと機能が変化したと考えられた。

上層タイプの「貝符」のうち、発掘当初から注目されたのが、第2次調査で出土した「山字貝符」で、この「貝符」が発見された8月22日夜、金関丈夫氏は、新聞社の学芸部に、「広田遺跡より、「山」の漢字を彫った「貝符」一個を発見。書体は「漢隸」(漢時代の隸書のタイプで極めて立派な書体)。弥生中期。日本最初の漢字。この遺跡の古代中国との交渉確認さる」との電報を打ち、紙面で大きく報じられた。当時、広田遺跡の上層は、出土した土器から、弥生時代の後期で紀元後2世紀末頃と考えられてい

て、その後、書道の専門家から後漢末の隸書とお墨付きを得た「山字貝符」は、「日本最古の文字」として学界を超えて広く知られてゆくことになった(金関丈夫1975『発掘から推理する』)。

報告書の刊行と遺跡のその後

しかしながら、広田遺跡の発掘報告書の刊行には多年の年月を要し、調査記録と出土資料は天理大学の金関恕先生の手元で保管された状態が長く続いた。歴史文化学科の開設に伴って天理大学に着任した筆者が、ほどなく、金関先生から、広田遺跡に関する科研費の申請を行いたいとの相談を受けたのは平成7年(1995年)のことだった。九州大学の若手研究者・中園聡氏が、「山字貝符」は文字を表したものではないとする学説を打ち出したことに対して、正式な発掘調査報告書を刊行する必要性を改めて感じられたのだ。そこで、金関先生を代表として、弥生～古墳時代の貝文化を研究する木下尚子氏など、各方面の研究者の参加を得て科研費を申請したところ、幸い、採択されることになり、平成8年度(1996年度)から3年間の共同研究が開始されることになった。木下氏や当時の学生たちとともに、保管箱から取り出した見事な貝製品の数々は、発掘から経過した40年の歳月と関わりなく、皆まぶしく白い光沢を放ち、その見事に息を呑んだ。こうして整理作業に取りかかったものの、3年で作業のすべてを終了させることは無理だった。1年間の中断ののち、協議の結果、鹿児島県が報告書作成経費を負担することになり、膨大な資料や記録との悪戦苦闘の日々がさらに4年間続き、平成15年(2003年)、ついに正式な発掘調査報告書が刊行されるに至った。

その後、膨大な遺物は鹿児島県に寄贈されて、県の歴史資料センター黎明館の収蔵資料となり、さっそく記念の特別展が開催された。平成18年(2006年)には、貝輪、貝符、龍佩形垂飾品といった貝製品2008点などの出土資料が一括して国の重要文化財に指定された。また、平成17年(2005年)～18年(2006年)には、南種子町教育委員会



写真2 人骨の出土位置を示した「墓標」

による遺跡の再発掘調査が行われ、砂丘の北端にも同時期の墓地が存在することが新たにわかった。平成20年(2008年)には、「列島の弥生、古墳時代社会と南島社会の接点」「わが国の文化形成の多様性」を知るうえで重要として、国の史跡に指定された。さらに平成27年(2015年)3月、整備された遺跡の隣接地に、ガイダンス施設として広田遺跡ミュージアムがオープンし、各種の出土資料が展示されるとともに、遺跡の特徴が実物、模型、映像によって紹介された。報告書の刊行により、発掘当時は弥生時代後期(紀元後2世紀末頃)と考えられた上層埋葬の年代が6～7世紀に下がることが判明し、「山字貝符」はもし文字であるとしても、最古の文字とは言えなくなった。しかし、地元有志による「語り部の会」の活動など、ミュージアムを拠点とした遺跡の保存・活用に対する地域の取り組みは、遺跡から見える宇宙センターと並び、全国の「最先端」をゆく。